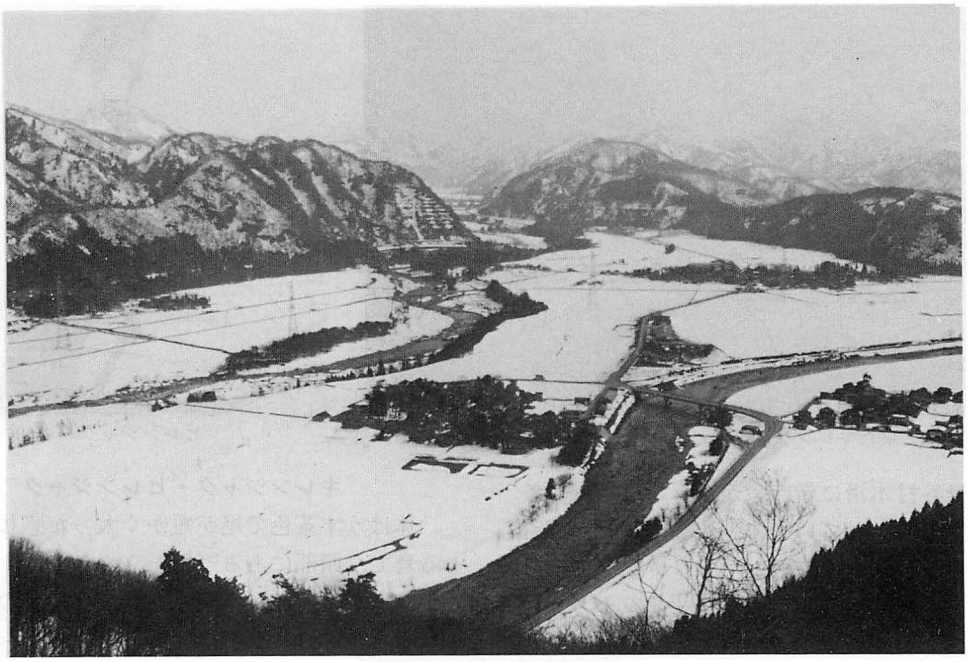
ISSN 0388－4732

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第12巻　第4号



大日・手取川の遠望

石川県第一の大河である手取川は，白山にその源を発し，石川郡・能美郡を経て日本海に注いでいます。途中，鳥越村河合･河内村江津付近で，第一の支流大日川と合流します。写真は，鳥越村河合鉱山林道から手取川（左）と大日川（右）の合流点手前付近を撮ったもので，中央の集落は鳥越村下野です。このあたりは，鶴来より奥の手取川中・下流域では河岸段丘上の平坦地が最も発達しています。写真を撮った3月中旬には，段丘上の水田はまだ雪に履われていました。

写真右側手前に伸びている尾根の先端部が本誌でとりあげた鳥越城のある城山で，はるか遠くの白山の峰々にまでつながっています。鳥越城は，鶴来・金沢方面，及び能美・小松方面と白山麓をそれぞれ結ぶ交差点に位置するだけに，本誌で紹介したように古来，戦略上の重要拠点となってきました。

今冬の自然保護センターに来た鳥たち

上馬康生

カキの木に来たキレンジャクとヒレンジャクの群

ヒレンジャク

吉野谷村木滑に新庁舎ができて2年目の冬が終わろうとしています。現在の建物は高台にあり，周辺を林で囲まれた静かなところです。窓からは手取川西岸の山や集落がみえ，すぐ近くには数本のカキの木が目につきます。昨年の冬，ここで過ごして初めて気づいたことは，たくさんの鳥たちが近くに来て私たちを楽しませてくれるということです。冬は生きものにとっては，餌さがしや寒さと闘わなければならない厳しい季節です。そんな中で木に残された赤く熟したカキの実は，またとないごちそうです。

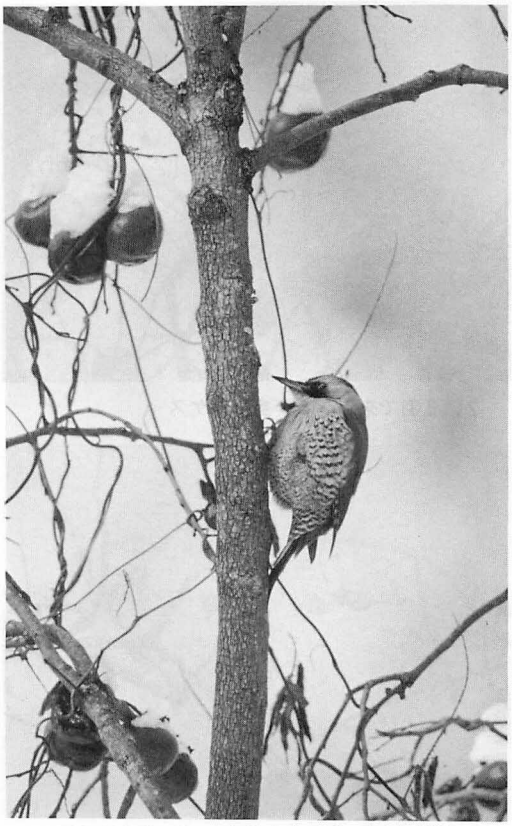
昨年に続いて今年も，1月に入ってからこのカキの木に鳥たちがくるようになりました。特に大雪の降った後の1月下旬になると，いろんな種類の鳥が入れかわり立ちかわりやってくるようになりました。ここでその鳥たちのいくつかを紹介しましょう。

キレンジャク・ヒレンジャク

体はうす茶色で尾が短かく太った感じのする鳥で，頭部にある冠羽を立てた姿は，他の小鳥にない気品さを感じさせます。尾の先端が黄色のキレンジャクと，赤色のヒレンジャクが入り交じってカキの木に来ていました。10数羽から多いときには200羽を超す群となってやってくるので，これらの鳥が来るようになってまもなくカキの実は食べつくされてしまいました。両種は入り交じってはいるものの，それぞれ一方が大部分を占める群がよく見られ，基本的にはそれぞれの種でまとまって行動しているようにも見えました。数はどちらも少なくとも50羽はいました。当地へは冬鳥として渡ってきたもので，春には北方へ帰っていきます。

実をつつくツグミ

カキの木の常連，シロハラ



尾をささえにして右足１本で立つアオゲラ

ツ　グ　ミ

秋にシベリア方面から大群で渡ってくる冬鳥としてよく知られており，胸から腹にかけての黒っぽい班点や，目の上の白い眉(眉班)が目立つ鳥です。昔は食用として大量に捕まえられたようで，保護鳥に指定され，カスミ網が禁止されている現在でも，毎年秋になると密猟の記事が新聞にのります。いつもは畑や水田などの開けたところの地上で餌をさがしていることが多いのですが，庭先の木の実にくることもあります。カキの木には１羽か数羽の小さな群で毎日のようにやってきました。

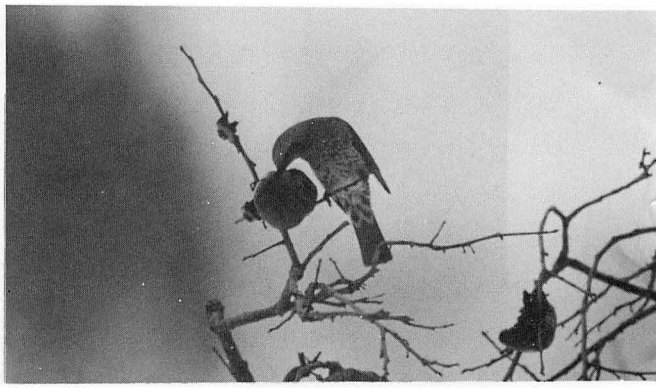
シロハラ

ツグミと同じ仲間の鳥で，やはり冬鳥として渡ってきます。頭部や背面は褐色で，地味な目立たない鳥です。その名が示すように腹面が白っぽく，背面とはコントラストを示しているのが特徴といえば特徴です。いつもは林の下の地上のうすぐらいところにいることが多いのですが，カキの木にもやってきました。気の強い鳥で，キョキョキョと鳴いてはツグミなど近くにくる鳥を追い払っていました。ほとんど１羽でくるようでした。

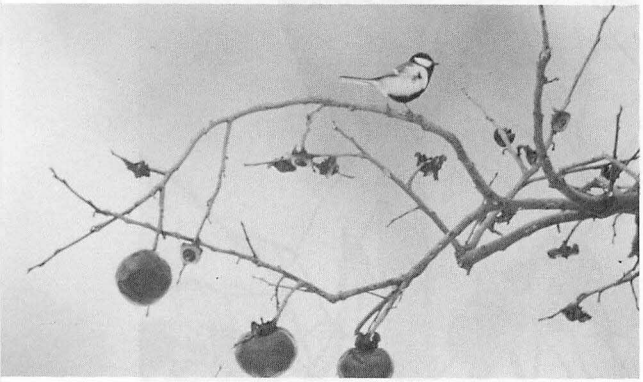
アオゲラ

背面が黄緑色で頭部に赤色の部分があるキツツキで，この付近では留鳥として一年中みられます。カキの木では体を幹と平行にして上下に動きながら，その長い嘴で幹の上を連続してつついては餌をさがしたりしていましたが，カキの実を上手に吸いながらさかんに食べていました。頭部全体が赤い雄と後頭の一部のみ赤い雌の両方ともみられました。他にキツツキの仲間ではコゲラとアカゲラが来ていましたが，アオゲラのようにカキの実を食べることはありませんでした。

2，3羽で来ることが多いカケス



実を食べるヒヨドリ



いつも1羽できたシジュウカラ

一度だけ立ち寄ったハシボソガラス

ヒヨドリ

この鳥も一年中近くで見られます。全身灰色ですが，ピーッ，ピーッとかピーヨ，ピーヨとよく鳴き，小群でいることが多いのでよく目立ちます。カキの木ではツグミとともに常連のひとつで，毎日のようにやってきては鳴きかわしていました。しかしあまり長く居座ることはないようで，飛び去っては近くの林で何か他の餌をさがしているようでした。

シジュウカラ

町の公園から1,500 mを越す山まで，林のあるところに広く分布している鳥で，留鳥として一年中みられます。秋から冬にはヤマガラやヒガラ，エナガなど他種といっしょになった群でみかけることが多いのですが，なぜかカキの木には1羽で来ていました。鳥たちのために枝につるした牛脂の固まりに時々来てはつついていました。

この他にカケス，ヤマガラ，エナガ，ハシボソガラス，シメ，ムクドリ，アトリがカキの木に姿を見せ，合計16種になりました。カキの木を注意して観察していたのは，1月下旬から実がなくなる2月初めまでの1週間ばかりです。この間にこれだけ多くの鳥たちが来たのです。もちろん見落しもあると思われます。また必ずしもカキの実が目当てではなく，幹の皮のすきまなどに越冬している虫をさがしに来たり，一時的に休息のため立ち寄ったものもいるでしょう。実がなくなってからはひっそりしてしまったカキの木ですが，来年の冬もきっとたくさん訪れてくれることと期待しています。

（白山自然保護センター）

除草回数とブナ苗木の生長について

八　神　徳　彦

ブナ林は，日本の冷温帯の代表的な森林で，白山地域は県内ではもちろん，全国的にもブナ林がよく残っている地域の一つです。ブナ林は，ニホンザルやツキノワグマなどの生活の場となっていますし，四季折々の光景は見る人に大きな感動を呼びおこさせます。

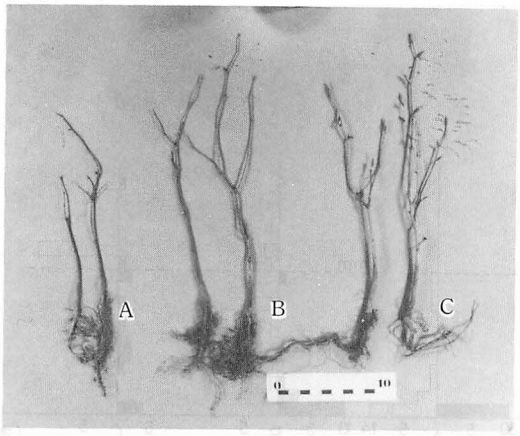
私たちは，かつてブナが生育していた所や，生育に適した場所に人手を加えて，どのようにしたら早くブナ林を復元させることができるか調査，試験を進めています。

ブナは小さな時に枯れやすい木で，この原因の一つとして雑草との競合が考えられます。そこで，除草をしてやればブナの苗木にどのような効果，影響を及ぼすか調べてみました。

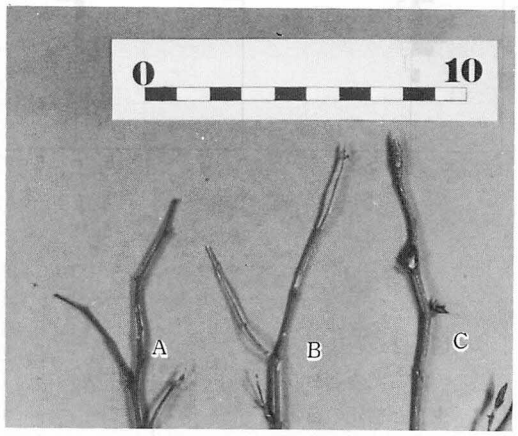
調査に使ったブナの苗木は，昭和57年秋に白山麓で採集したブナの実を，鶴来町の県林業試験場の苗畑に播いて育てた2年生苗の一部です。昭和59年4月下旬に肥料を施して畑に植え替え，4月，5月，6月に害虫が発生したので農薬を散布しました。除草は，6月下旬，7月上旬，8月上旬に雑草が苗木を完全におおってしまった時に行いました。雑草は，メヒシバが多い所とヨモギが多い所がありました。苗畑に1m×1mの枠を3箇所設けて調査区とし，それぞれ，A，B，Cとしました。1m×1mの枠の中には，ブナの苗木が63本ずつ植えてあります。Aは除草を1回もせず草を伸び放題にし，Bは6月に1回だけ，Cは6，7，8月に1回ずつ除草をしました。どれだけ苗木が大きくなったかは，苗木の伸長の止まった59年秋に調べました。調べた部分は，苗高，1次伸長量，2次伸長量，頂芽長です（図―1）。

図―2に苗高と除草回数の関係を示しました。黒が枯れた苗木，白が生きていた苗木です。除草をしなかったAは枯れていた苗木が多く，また苗高も低いものが多い。除草1回のBと3回のCは，Aに比べて枯れた苗木が少なく，苗高も高い。BとCは苗の高さの大きなちがいはありません。

ブナの苗木は，春先に1度伸びたあと条件

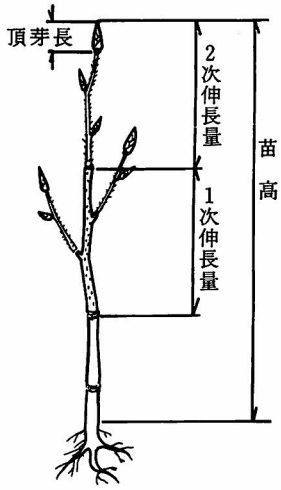


A，B，Cの代表的な苗木（単位：cm）

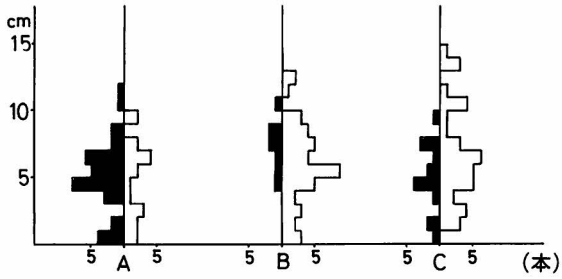


それぞれの先端部　（単位：cm）

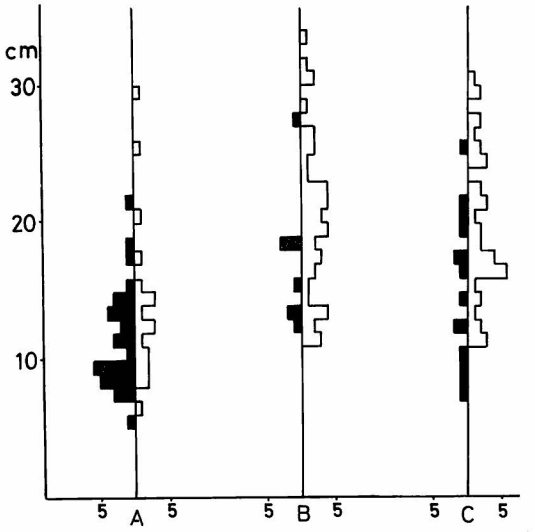
A：1次伸長したあと枯れた（除草0回）B：2次伸長したあとしなびてしまうか，弱々しい冬芽をつける（除草1回）
C：丈夫に育って冬芽も大きい（除草3回）



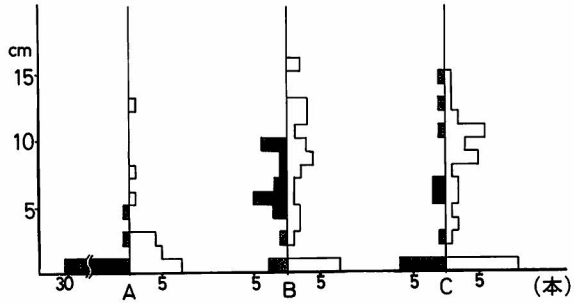
図―1　ブナの苗木の計測箇所



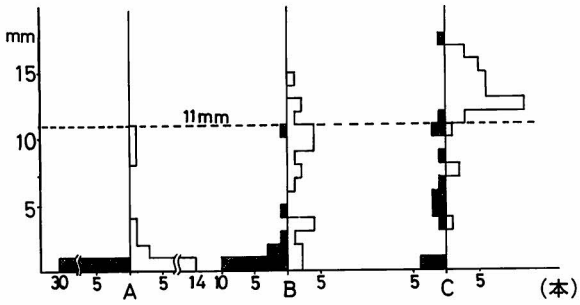
図―3　1次伸長量



図―2　苗　高



図―4　2次伸長量



図―5　頂　芽　長

※図―2から図―5までは右記のとおり、生存と枯死の苗木数が示される。

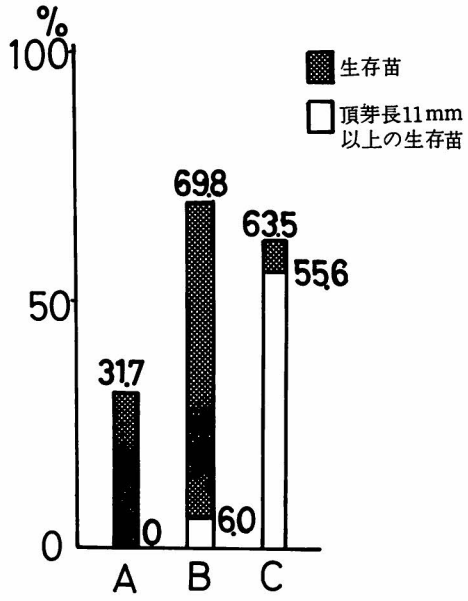
が良ければ7月頃2度目の伸長をします。前年の間に貯えておいた養分をもとに春先に最初に芽が伸びることを1次伸長といい，1次伸長量とはその長さをいいます。図―3に1次伸長量と除草回数の関係を示しました。1次伸長は1回目の除草の前にすべて終わっているので，秋の調査時点で枯れていた苗木もあわせると，A，B，Cとも1次伸長量には大きな違いがありません。

図―4に2次伸長量と除草回数の関係を示しました。2次伸長とは，条件が良いとき，苗木が7月頃2回目の伸長することをいい，2次伸長量とはその長さをいいます。2次伸長量は，Aでは少なくBとCでは多いことが分かります。また，除草をしなかったAでは，2次伸長をしてもその若枝の多くが枯れてしまいました。1回芽が伸びてから，2回目の芽がのびるまでの間に草におおわれていると，2回目の芽が大きくならずに枯れてしまうことがわかります。

図―5に頂芽長と除草回数の関係を示しました。頂芽とは，苗木の先端についている芽で，この芽は冬ごしをします。除草していないAでは多くの苗木が頂芽をつける前に枯れてしまいます。除草を1回しかしなかったBでは，3回したCに比べて頂芽長が小さく，また，Bでは2次伸長した若枝がしなびて頂芽をつけるに至っていないものも多くあります。2次伸長までは，よく似た生長をしているBとCの頂芽長がちがうのは，2次伸長がはじまってからBが草におおわれてしまうためだと思います。

図―6に秋の時点での生存率と11㎜以上の頂芽を持つ苗の生存率を示しました。枠の中に植えた63本中の生存率は，除草を1回したBが最も高く、3回したCもこれと並んで高いが，除草をしなかったAでは生存率は低いことが分かります。

頂芽は，頂芽長が11㎜以上であれば成木してゆく可能性がありますが，9㎜以下だと多くのものがやがて枯れていくとされています。そこで11㎜以上の頂芽を持つ苗の生存率を図―6の白ぬきで示しました。これによると，頂芽長11㎜以上を持つものはAで0％，Bでは6％にすぎず，Cでは55.6％ありました。すなわち，AやBのように除草をあまりしないと，ほとんどが次の年以降には枯れてしまうことが分かります。



図―6　苗木の生存率

まとめ

ブナは小さい時に枯れやすく，その原因の一つと考えられる雑草との競合関係を除草の効果から調べてみました。その結果次のことがわかりました。

- ブナの苗木は，春先の1回目の芽が伸びても，その後草におおわれていれば，ほとんど生育できない。
- 7月頃の2回目の芽が伸び始めてから草におおわれれば，生きてはいるが冬芽の形成に悪い影響を与え，翌春の順調な伸長は望めない。ただし翌年の環境条件を良くしてやれば，回復してゆくかもしれない。
- 草に完全におおわれても，それが短期間であるならば苗木は丈夫に育つ。

（白山自然保護センター）

鳥越城と一向一揆

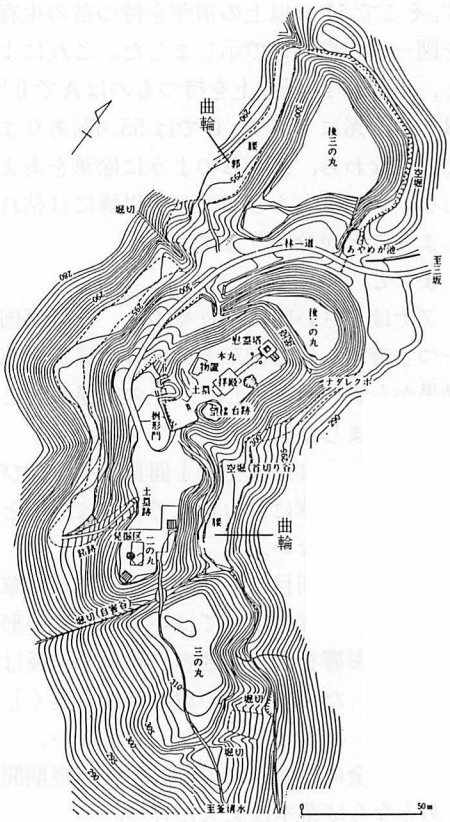
波佐谷　　聡

鳥越城跡の位置と環境

鳥越城跡は手取川と大日川の合流点から上流約3㎞の地点にあります。白山々系から続く鷲走ヶ岳（標高1,096.6ｍ）が，北西方向に尾根幅をせばめながら高度を下げ，手取・大日両川の河岸段丘に向けて尾根の途切れた所が鳥越山で，標高312ｍの所に鳥越城跡の主要郭があります。

中世山岳城ということを考えると，城跡の範囲は鳥越坂から北の鳥越山全域と思われ，南北1,300ｍ，東西400ｍ，面積約26万㎡を占めています。

一番高い本丸跡に立って周囲をみわたすと，南は低くなって鳥越坂をよぎり嶽峰（標高505ｍ）に続きます。他の三面は急傾斜して，大日川，手取川の河岸段丘につながり，山里からは屹立した独立丘陵的な地形になっています。西側は大日川筋の水田や村落が三坂から相滝あたりまで見下すことができて，川一筋向うのゆるやかな南加賀の山地の一端をうかがえます。東側をのぞくと手取川の谷間が目の下に見え，上流の下吉野から川添いの村落が下流の北方へ追視され，手取・大日両河川の合流点から遠く鶴来町の白山（シラヤマ）あたりまで遠望がきき，攻防両面について充分戦闘指揮をとることができるようになっています。また南西には大日川を隔てて「二曲（ふとげ）城」「殿様屋敷跡」があり，北西には標高480ｍの火燈（ひともし）山があり，鳥越城から見張りの兵を出し，小松・能美平野の状勢をかがり火を焚いて知らせたと伝えられています。



図―１　鳥越城主要城郭図

鳥越城跡には，頂上部（標高312ｍ）を中心として７ヶ所の遺構（平坦地）があり，尾根筋に郭をつくる連郭式城郭となっています。昭和30年の林道工事により数ヶ所の平担地や土塁が破壊されましたが，本丸を中枢とする連郭式城郭をさらに複雑な入り組みと高低差を持たせて，郭，塁，堀を配置する縄張りによって，より一層防御機能を高めるように築かれたことがわかります。

鳥越城跡の郭配置

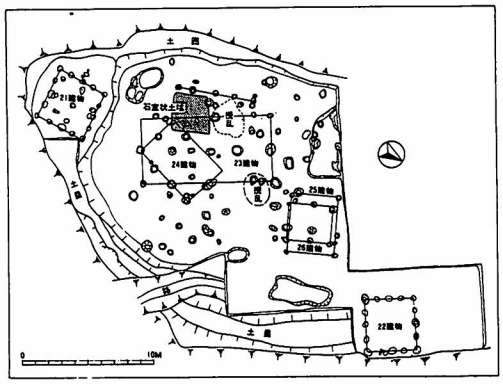
主要な５ヶ所の平担地については，本丸・二の丸・三の丸・後二の丸・後三の丸と呼称されています(図―１)。北端にある平面隅丸三角形状の平担地が後三の丸で，北，東，西が急傾斜の法（のり）をつけ，南方に高度を下げながら２ヶ所の平担地を造り出して，本丸の北方を守る重要な堡塁であったことがわかります。昭和54年に発掘調査が行なわれ，柱穴や

焼土・炭が発見されました。

後二の丸は本丸の北方に位置し，幅 10 m，深さ 5 mの空堀によって画され，本丸との比高差は 5 mあります。半円状の長さ約 25 m，最大幅約 18 mの平坦地で，南西隅には本丸西法面下の平坦地に通じる道があります。

本丸は南北 40 m，東西 25 m，南北方向に細長い方形の平坦部で，他の郭とは趣を異にした平面形態となっています。南東隅に望楼台跡と呼ばれる 2.5 m程の高まりがあり，南西部には土塁が築かれています。本丸の南方向に直結して桝形門があり，二曲城方向にむけて門をひらいています。昭和 52 年度に発掘調査が行なわれましたが，石垣を組みあげた東西約 23 m×南北約 11 mの小規模なもので，門の礎石は三個が原位置を保っており，幅 3.3 m・奥行き 2.1 mが測定されます。門の形態は本柱 2 本を前方に，控え柱 2 本を後方に立て，切妻屋根を載せる薬医門が想定されています。

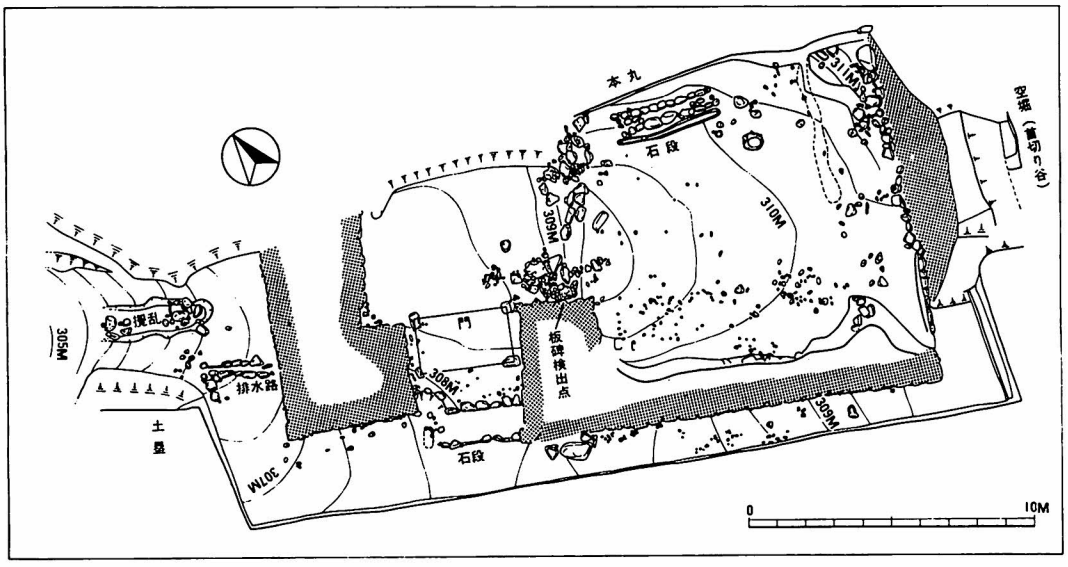
二の丸は大日川をのぞむ腰曲輪（帯曲輪とも言う。山裾をめぐる平坦地）の南端から、幅約 5 mの道をのぼりつめた南東部にあります。昭和 53 年に発掘調査が行なわれましたが、6 つの建物が確認され，特に南西隅に約 3 m



図―3　二の丸発掘区遺構配置区

平方，深さ 1.5 mの土坑（穴ぐら）が発見されました。砂岩質の岩盤を掘りこんでいるため，壁面は石を積み上げた石室状をし，食糧の貯蔵施設あるいは物置に利用されたらしく，北西隅には掘り残しがあり昇降に使われたものと思われます。土坑は意図的に埋めもどされており，下層には炭化物・焼土・灰層が 75 cmにわたって堆積し，その中に，刀・鉄砲玉などの武器類と磁器・遊戯具・化粧用具・炭化穀物などの日常生活用具の遺物が採集され，16 世紀末葉という限定された期間における一括資料として貴重なものとされています。

三の丸は二の丸の南東方向にあり，渡土橋によって結ばれていて，長さ約 55 m，最大幅



図―2　桝形門発掘区遺構配置図

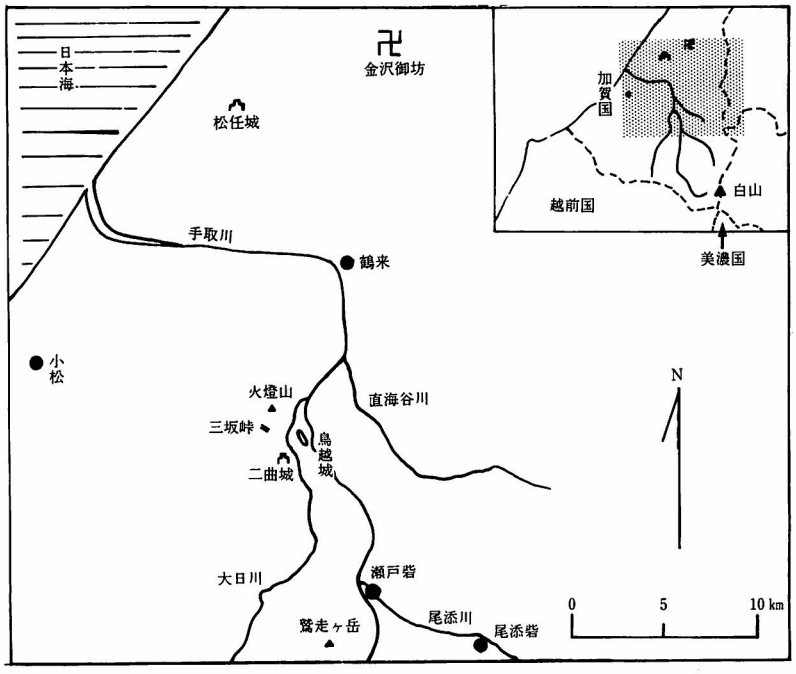
約30mの平担面で，痩尾根にあまり大きな造作を施してなく，前線基地的な性格の強い郭であります。周囲に対して死角を排除する意味で側面が曲折しています。

鳥越城史と鈴木出羽守

この城を築いたのは鈴木出羽守（重泰ともいう）で，加賀国白山麓の一向一揆の軍事的拠点として築かれました。元亀元年（1570），本願寺と織田信長との間に石山合戦が始まると，その軍事的緊張は加賀一向一揆にも波及し，本願寺家臣の下向をもって門徒組織の再編強化が図られ，織田方の来攻に備えて，能美平野へ通じる三坂峠を押さえる二曲城，越前・牛首口に瀬戸砦，美濃口に尾添砦などが整備拡充され，鳥越城を主城とする白山麓の要塞化が進められました。

鈴木出羽守の出自については，あまりよく知られてはいませんが，先学により二つの説がとられています。一つは西谷組（後述）の旗本であった二曲（ふとげ）右京進が領主的発展をとげたものとする説です。もう一つは，石山合戦で本願寺方の軍事指揮官であった，紀伊雑賀（さいか）一揆の首領鈴木孫一重秀の一族とする説です。天正6年(1578)，本願寺法主顕如から軍忠を賞され，いっそうの忠節を要望する書状（白峰村林西寺蔵）の宛名には，白山麓門徒組織である山内惣庄と鈴木出羽守が併記されていることから，山内惣庄四組(西谷，河内，吉野谷，牛首各組）のうちの西谷組（大日川流域を地盤とする門徒組織）の旗本の立場を超えていることがうかがえます。さらに『信長公記』によると，同8年11月17日，織田信長の安土城へ届けられた加賀一向一揆指導者の首級19（鈴木出羽守父子を含む）のなかで，父子ともども首をはねられた者は，本願寺から派遣された武将に限られていることがわかります。昭和52年から同54年の3ヶ年にわたる発掘調査により，後者の説を裏付ける遺物が多種多様に発見され，さらに二曲氏と鈴木氏を結ぶ史料に明証を欠くことから，鈴木出羽守は本願寺家臣であり，本願寺から派遣されていた金沢御堂衆に准ずる地位の人物であったとする説が有力になっています。

天正8年（1580）3月，11年の長きに及んだ石山合戦は，織田信長の攻勢に屈伏した本願寺顕如の石山本願寺退城をもって終止符をうちますが，同年4月，北陸一向一揆最大の拠点であった金沢御坊が柴田勝家の猛攻にあい，陥落するに及び，加賀の一向一揆勢力は舞台を能美丘陵と白山麓に移します。鳥越城に拠る山内衆は，白山麓の諸口へ攻め寄せる柴田勢を必死に撃退して善戦していましたが，柴田勝家から本願寺安堵を条件とした停戦和平の協定をもちか



図―4 鳥越城周辺図

けられ，これに応じた城主鈴木出羽守が父子もろとも松任城で殺害されるという謀略にあい，同年11月，築城以来僅か10年足らずにして，天然の要害と篤信の門徒衆に守られていた鳥越城は，二曲城と共に落城します。

加賀国を平定した柴田勝家は戦後処理として，金沢御坊を尾山城として佐久間盛政を，鳥越城には吉原次郎兵衛，二曲城には毛利九郎兵衛をおきますが，天正9年2月，織田信長が京都で馬揃えを行なった防備の隙をついて，吉野谷・別宮の門徒たちが蜂起し，鳥越城・二曲城の奪回に成功します。ほどなく尾山城にいた佐久間盛政に鎮圧され，鳥越城には新しく吉竹壱岐がおかれます。しかし，天正10年2月，甲斐の武田勝頼から織田方の後方攪乱を懇望された尾添・吉野谷7ヶ村の門徒たちは，鳥越城奪回をめざして再度蜂起します。だがこれも鎮圧されますが，織田信長から一揆残党の掃討の命を受けた佐久間盛政の弾圧は峻烈を極め，山内衆から三度にわたる抵抗を受けたことから，300人にも上る門徒たちが捕えられ磔刑にかけられ，尾添や吉野谷の村々は廃村同様となり，以後3年間は人が絶えたと伝えられています。白山麓の各地に残る「子ころし谷」「かくれ谷」「泣き平」の地名は，その際の名残りであると伝えられています。

む す び

鳥越村では現在「一向一揆の史跡をもつふるさと」と村民憲章にうたい，村民の総意のもとに日本史世史に輝かしい歴史をもつ鳥越城跡と二曲城跡を永久に保存管理するため，地権者の同意を得て，昭和60年4月をもって，国の史跡指定を受ける見込みでいます。山城ということで面積が広く，多くの地権者の方々にご迷惑をかけるかと思いますが，今後，年次的に発掘調査と整備を進め，村内外の人達が，信仰に生きた鳥越村の祖先が残した足跡をしのび，明日を生きぬく活力を見い出されるよう事業を進めたいと思っています。村内外の人達がこの事業の推進に，ご協力，ご援助を賜りますよう，念願してやみません。　（鳥越村教育委員会）

参 考 文 献

『石川県鳥越村史』　（昭和47年）
中川一富士著『加州山内鈴木出羽守』　（昭和49年）
中川一富士著『加州山内鈴木氏の拠城跡』　（昭和50年）
『鳥越城跡発掘調査概報』　（昭和54年）

桝形門発掘区

新聞記事にみるツキノワグマ

田　中　敏　之

日毎に陽ざしが柔らかく感じられるようになってきました。山の生き物達は一斉に萌え出した草木の芽を食べにナバタ（アザミやウドが豊富な高茎草原）に集まってきます。ふだんはあまり人目につかないクマも残雪期の早春には発見することもできます。そして，新聞などでクマ出没の記事が目につくのもこの頃からです。

ツキノワグマに対する認識

ツキノワグマに対する県民の認識を知るために前田和佳氏（奈良大学文学部，現在金沢市在住）によってアンケート調査が行なわれました(表1)。アンケートの結果から，クマについての知識と関心度を市街地，山麓の町，山村のそれぞれの住民間で比較すると，分布，食性，習性のどの点においても，山村住民が最も正確な知識をもっていました。クマが比較的身近かな存在であり，見たことがあるという人の多い山村では，本人の経験あるいは家族や隣人からの実際の観察にもとずく情報がクマ生態の理解につながっているのでしょ

表1　ツキノワグマに関するアンケート結果（水野・前田ほか 1984）

	市街地	山麓の町	山村	
設問　回答	金沢市・小松市	鶴来町・辰口町	白峰村・尾口村 吉野谷村	計
	N＝87	N＝56	N＝54	N＝197
	%	%	%	%
よく山に行きますか				
行く	29.9	26.8	35.2	30.5
行かない	70.1	73.2	64.8	69.5
野生のクマを見たことがありますか				
有	3.4	10.7	29.6	12.7
無	96.6	89.3	70.3	87.3
あなたの市町村にクマがいますか				
いる	11.5	60.7	88.9	46.7
いない	88.5	39.3	11.1	53.3
クマは有害な動物だと思いますか				
はい	40.2	64.3	29.6	44.2
いいえ	59.7	35.7	70.4	55.8
クマは故意に人を襲うと思いますか				
はい	33.3	19.6	13.0	23.9
いいえ	66.6	80.4	87.0	76.1
クマの数は増えていると思いますか				
増	17.2	48.2	14.8	25.4
変らない	33.3	19.5	48.1	33.5
減	49.4	32.1	37.0	41.1
クマを保護するか撲滅か				
保護	51.7	32.1	38.9	42.6
わからない	39.1	50.0	55.5	46.8
撲滅	9.2	19.7	5.6	10.6

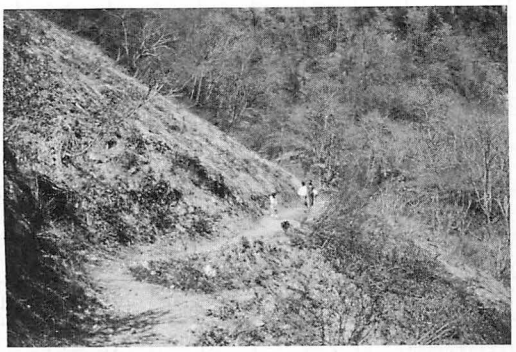
う。

クマを直接に見る機会の少ない人々にとっては，マスコミを通じて得る情報がクマの認識に大きく影響しているようです。たとえば，ツキノワグマが肉食であるという誤解があるのには，テレビなどでヒグマやホッキョクグマの肉食の場面を見ることで，これらのクマとツキノワグマとの混同があるのです。日本ではヒグマは北海道だけに分布していて，本州・四国・九州（九州では絶滅したと考えられる）に分布するのはツキノワグマです。

表2　新聞に見られるクマの出没・被害・駆除

年	記事数
1964	5
65	2
66	1
67	2
68	9
69	2
70	19
71	5
72	8
73	5
74	8
75	8
76	6
77	14
78	5
79	9
80	9
81	4
82	13
83	26
84	2
計	162

月	記事数	うち人身
1	3	
2	0	
3	6	1
4	13	2
5	27	2
6	33	3
7	20	2
8	20	
9	12	
10	9	
11	12	1
12	7	
計	162	10



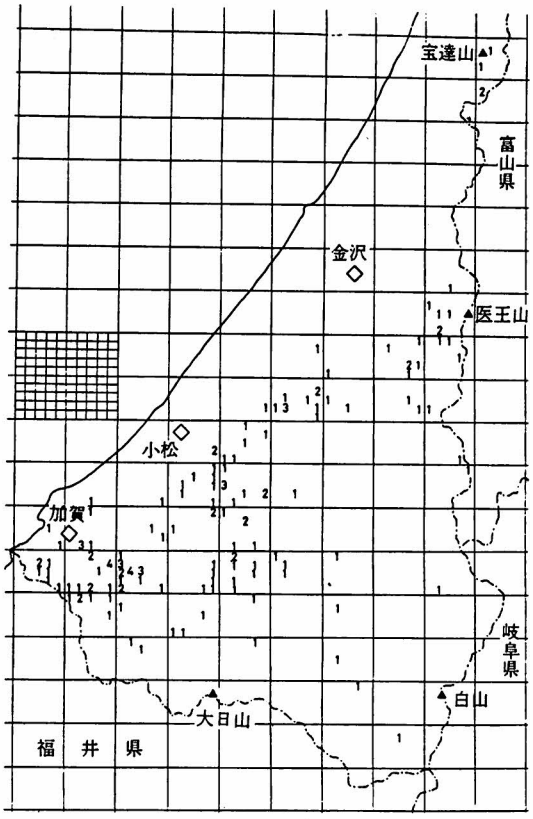
春のナバタ

新聞にみるツキノワグマの出没

石川県の北国新聞に過去21年間で報道されたクマに関する記事は176件ありました。これらのうち，クマの出没・被害・駆除についての記事162件の年別，月別件数は表2のとおりです。年別では，1970，77，82，83年が他の年に比べて多く，いわゆる異常出没の年として騒がれました。このようにある特定の年に出没件数が急増することは他県でもあり，1982，83年には秋田県などの東北地方でも異常出没といわれ駆除数が急増しています。この異常出没の原因として，秋の山での食べ物の作柄が重要であると考えられますが，はっきりとした因果関係はつかめていません。

月別の出没頻度では6月をピークに5月から8月にかけて多くなります。これはクマの行動域調査などから知られている行動範囲の広くなる季節と一致します。クマの主な食べ物をみると，アリやハチなどの昆虫の他は，食物の大部分を植物に頼っています。春のナバタや，秋のいろんな果実のような，良質でまとまった量の食物がある季節以外は，食物を求めて広範囲を移動する結果，人との遭遇や農地への出没機会が多くなるものと考えられます。

新聞にとりあげられた出没・事件発生地の分布をメッシュ（約1km四方）に記入すると図のようになります。出没が被害につながっ



新聞にみるツキノワグマの出没・被害発生地点
（数字は記事数）

たり，事件としてとりあげられるのは白山山系に続く低山帯下部で，クマの分布地域の周辺部に集中しています。これらの低山帯では1960年頃から焼畑耕作や炭焼きが急速に衰退し，山間小村が次々と廃村となり，人間の生産活動の最前線が大きく低地へ移動し，クマの通常の行動範囲を低山まで拡げることとなりました。これら一連の森林環境の変化が比較的大きな村や町の近くでのクマの遭遇の機会を増加させているものと考えられます。一方，クマの生息数の多い白山を中心とした山間村落などでは出没頻度が多いのですが，クマの生態に関する知識があって，クマ出没に対して，そんなに騒ぐことがなく，新聞記事として扱われていません。

被害内容

新聞で扱われたクマについての記事を内容的に分類すれば表3のようになります。出没記事が全体の39.8%と最も多く，次いで31.8%の駆除・捕獲記事であり，これらで全体の約70%となります。物的な被害が記載されているものは43件あり，具体的な被害内容を表4に示します。

養蜂被害は6件あり，この他にも被害を受けたという情報や有害鳥獣駆除の申請は多くあります。また家屋を荒らされた2件と墓を破壊した2件は，ともにミツバチやジバチの巣を狙ったものです。漫画に登場するように，野生のクマはハチミツが大好物で，強い執着を示します。

車と衝突又は接触した事件は5件で，うちの2件は北陸自動車道での事故でした。

果樹の被害で最も多いのはカキですが，自家用あるいは廃村に残された木に来るものであり，被害自体は大きな問題になっていません。平素クマのいない地域でクマが人家近くへ来てカキを食べた場合は話題となっているものの，山間集落でのクマ出没は珍らしくなく，新聞にとりあげられるような話題にはなりません。

また東海地方から西日本にかけて大きな被害となっている植林地での皮剥ぎについては，石川県内では1例がとりあげられているにすぎません。

総合して，石川県ではクマ被害として最も

表3　石川県における21年間のクマに関する新聞記事内容（北国新聞による）

内容	件数	%
出没	79	39.8
人身被害	10	5.0
農林被害	22	11.0
駆除・捕獲	64	31.8
生態・研究	22	11.0
保護	4	2.0
計	201	100.0

（176記事のうち内容が多岐にわたるものは最大2項目までに分類し201件とした。）

表4　新聞にみられるクマの被害

被　　害	件　数	備　　考
人身	10	
車	5	
養蜂	6	
家屋	2	
墓	2	
カキ	8	
ブドウ	3	
その他果樹	4	クリ，モモ，スモモ
畑	2	スイカ，サトイモ
杉	1	皮剝ぎ
計	43	

問題となるのは，出没による恐怖とまれにおこる人身被害であるといえます。

人身被害

クマは年間を通じて食物を主に植物に頼っています。ごくまれに，春先のクマの胃からカモシカやウサギなどの動物質のものが出てきますが，これは雪崩などで死んだ動物を食べたもので，生きたものを襲って食べたものではないと考えられています。

クマが人を襲ったという事件は，クマが人を喰う目的で攻撃するのではなく，他に原因があります。石川県でのクマによる人身被害は過去21年間に10件起こっていて，このうち5件が重傷を負っているものの死亡例はありません。加害者となったクマは，当事者や駆除隊の話から仔グマを連れた母グマであったと考えられる場合が多く，事実，春から初夏の事件9件のうち6件は明らかに仔グマを確認しており，他1件も足跡から仔連れだったと推察されています。普通クマは冬眠中に1～2頭の仔グマを出産し，約1年半の間，仔グマと連れだって生活します。仔グマを連れた母グマは，母性本能がたいへん強く，単独ならば逃げる状況であっても，仔グマを守るために人間に攻撃を加えることもあります。また春先はもっとも気軽に山菜採りなどで山へ入る人が多くなる季節でもあり，被害をうけた人は，一人で山菜を取ったり，山作業をしていてクマの発見がおくれ，親子グマに接近しすぎています。クマによる人身被害はほとんどこのような状況で起っています。

以上見てきたように，クマに対する住民の認識や，新聞で扱われるクマ記事は多様です。山間村落では，クマは昔から肉・毛皮・熊の胆など有用な資源として狩猟対象とされており，クマの生態について理解がありますが，その他の地域ではクマは恐怖の対象とされるのです。今回収集した新聞記事の見出し等を見ると，クマの出没に対する恐怖・また捕獲した場合には退治したという表現が全体の87.8%（表3）とたいへん多く見られました。クマと直接かかわりをもつことのない読者は，クマの知識を得る大きな手がかりとなる新聞が，恐怖の対象もしくは有害獣として扱っていることによって，誤解するようになると考えられます。

マスコミや各種社会教育活動の中で，クマに関する正確な知識と多様な考え方を普及することが，クマの保護管理を可能にする社会的背景を作るのに重要になるのです。

表1のアンケートの設問9（保護か撲滅か）は，やや極端な問いかけでしたが，約半数がどちらともいえないと答えています。クマの保護管理の方策を検討するにあたっては，害獣駆除か保護かという二者択一だけで把えるのでなく，現実の状況を正確に判断する必要があります。白山においては，今後クマの食性・行動域・生活史などの生態調査を通じて地域個体群としての広がり，個体数・特性などが明らかにされてくると同時に，狩猟獣としての山の産物としてのクマや，山のシンボル又は神としてのクマなどの歴史的背景も含めて多面的に把えていかなければなりません。

（金沢大学大学院）

たより

今年は例年に比べて雪が少なく，多雪地といわれる白山麓でも道端にも，あまり雪が残っておらず，また，山肌からは雪がかなり消えています。白山麓には，待ちに待った春がすぐそこまで来ています。春になると，クマやサルが新しく芽ぶいた草花を求めて，白山の山の中で活発に動き始めます。

当センター主催の自然観察会が3月2日(土)～3日(日)に49人の参加者を集めて行なわれました。今回の観察会は，〝雪といきものたちのくらし〟というテーマで，尾口村一里野のブナオ山観察舎にて開かれました。観察会では，カモシカ，サル，ノウサギ，イヌワシが参加者によって見つけられました。野生の動物を見る機会というのは，一般の人にとってはあまりないことだと思われますので，手軽に野生の動物を見ることのできるブナオ山観察舎へおいで下さい。同観察舎には，今年度から大型双眼鏡（20倍）が1台追加されて2台になり，今まで以上にカモシカ等が見やすくなりました。山地斜面から雪が全く消える5月20日まで開館しています。

2月19日(火)に，当センターにて第2回白山地域自然保護懇話会が〝豪雪過疎地域における産業振興について〟というテーマを中心に開かれました。白山麓の山村はいずれも豪雪の克服と過疎からの脱却に取組んでおり，そうした地域での産業振興は多くの人々が望むところです。この他，白山の登山道，遭難慰霊碑の問題についても話し合われました。

第6回〝白山の自然教室〟が，3月16日(土)に当センターにて開かれました。当センターの東野外志男研究員を講師に，〝白山火山の形成年代〟というテーマで，白山の形成過程や，地質年代の推定方法などが紹介されました。

目　　次

表紙　大日・手取川の遠望……1

今冬の自然保護センターに来た鳥たち……上馬　康生……2

除草回数とブナ苗木の生長について……八神　徳彦……5

鳥越城と一向一揆……波佐谷　聡……8

新聞記事にみるツキノワグマ……田中　敏之……12

はくさん　第12巻　第4号（通巻54号）

発行日　昭和60年3月25日
発行所　石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920—23　Tel 07619—5—5321
印刷所　株式会社　橋本確文堂